

# 禅

---

34号(通巻214号)

---



野点をされる立田英山老師  
焼き栗を落葉にのせて野点かな 幽石 (昭42)

# 今を生きる

堀井 妙泉

この度（3月11日）未曾有の東日本大震災で亡くなられた多くの方々に、心から哀悼の意を表し、被災され、家族や親族を<sup>うしな</sup>喪い、家も財産もすべて失って着の身着のままで避難生活を送られている沢山の<sup>かつ</sup>人たちに、心からお見舞い申し上げます。一日も早く暖かい支援の手がさし伸べられ、元気を取り戻し、復興されますことをお祈りし、また<sup>こいねが</sup>曾て経験したことの無い原発事故の恐しさが、これ以上広がらないことを希<sup>こいねが</sup>っております。

明日ありと思ふ心のあだ桜

夜半に嵐の吹かぬものかは

この歌は親鸞上人の若い頃の師であったという慈円阿闍梨<sup>あじゃり</sup>の詠まれた歌であります。「今、まさに満開で美しく咲いている桜花も、夜半に嵐が吹けば、いっぺんに散ってしまうでしょう。この花の命、明日のことはわからないもの」という意であり、それと同じように人の命も、今元気であるから明日も元気であると思っていても、明日のことは誰にもわからないものであります。人の命ばかりでなく、この世に存在する生きとし生けるもの、すべての生きものはこの「死」から免れ得ないものでありましょう。

この度のような大災害が起れば、建物も街も一瞬にしてなくなり、昨日迄の様相が一変してしまい、人々は「あっ」という間に死の恐怖

へ突き落とされ、何も彼も失い絶望して虚脱状態に陥り、抛り所を失ってしまった多くの人たち、その被災者の苦難に心を寄せる日本中の人は皆、これまでにない痛みを共有し苦しんでおります。

しかし、不安と絶望に落ち込んでいると、ますます暗い谷底へのめり込む事になります。この困難を乗り越えるには、既往の習慣にこだわることなく、一切の執着を捨てて生き抜く英智と勇気を持たねばならないのであります。

宮澤賢治の詩に、<雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ 慾ハナク 決シテ瞞ラズ (略)

一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ(略) ジブンヲカンジョウニ入レズニ ...略...>とありますが、東北の風土に生きた賢治の熱い心が、今苦しんでいる人を、自らを捨てて救おうという、<sup>しんし</sup>真摯な祈りに深く共鳴したいと思えます。

古くから「禍福はあざなえる繩の如し」という<sup>ことわざ</sup>諺がありますが、<sup>そうそくそうにゆう</sup>楽と苦、吉と凶、順境と逆境も同様で、陰と陽とが相即相入し、表裏一体の関係にあるのが自然の理法であり、人生を貫く理法であります。

人生には百パーセントの「楽」もないが、百パーセントの「苦」もないものです。現在の苦の中に明日の楽しみ、喜びが宿っており、今日の楽しみの中に、明日の苦が宿っているのが人生の実相であります。

順境にある時は、決して有頂天にならず「治にいて乱を忘れず」と一歩退いて、手綱を引きしめて生きることでありましょう。また逆境にある時は、決して絶望しないで暫く辛抱し、努力することでありませう。

人間の本能として、死を怖れて苦悩したり、生に執着して、あれやこれやと取越し苦労しているものですが、それならば、この「死」から眼をそらさず、死と対決し、この事実をはっきりと認め、生き甲斐あるよう精いっぱい生きることが、知慧のある勇気のある生き方であ

ると思います。今こうして生きている一刹那を惜しみ、感謝の念で生きることでありましょう。

私共の生命は有限であり、せいぜい長生きしても百年ほど、やり直しの効かないもの、泣くも笑うも只一回限りの人生であります。死ねば一片の煙、一握の灰になるだけでお金は勿論のこと、何ひとつ持って行けないものであります。「人間とは、どのようなもので?」「人間とは如何にあるべきか?」と苦悩した釈尊は、この大問題を解く為に、王位も妻子も捨て、難行苦行の旅に出られたのであります。そして最後に「坐禅」の行によって悟りを開かれ、<sup>てつけん</sup>真実の自己(仏性)を徹見し、何ものにも煩わされることのない自己を確立され、【<sup>あゝ</sup>噫奇なるかな、一切衆生みな <sup>ことごと</sup>悉く如来の智慧徳相を具有す】と告白し、仏教を開かれたのであります。

人間は本来、無心無作の素直な心で生まれてくるものですが、成長するに及んで色々な知恵がつき、その知恵に被われて素直さがなくなり、心が濁ってくるものです。そして、俺が、私がという<sup>が</sup>我が出て、<sup>とん</sup>貪・<sup>しん</sup>瞋・<sup>ち</sup>痴の三毒に固まり、それに気がつかないままに生きているものであります。むさぼり、いかり、ぐちの心は人間の最も陥りやすい煩惱であります。坐禅の修行によって、その煩惱に被われている殻を破ると、心は清らかに磨かれ、素直な心を取り戻し、いろいろな外境の変化に主体的に即応し、何をすることも心が円滑に働き、当たり前<sup>が</sup>のことが当たり前<sup>が</sup>に出来るようになり、生きる喜びが全身に<sup>みなぎ</sup>漲ってくるものであります。

私共の日常は、とかく「昨日はかくありけり、明日もかくありなん」と惰性に流れ易いものですが、日々変遷し、無常迅速なるものであります。道鏡慧端禅師(通称正受老人)は、【一大事と申すは、今日只今の心なり、それをおろそかにして翌日あることなし、すべての人に遠き事思ひて<sup>はか</sup>謀ることあれども、<sup>はか</sup>的面の今を失うに心づかず】と、端的に説いておられます。

いま、大震災に続いて止まることのない原発の放射能漏れで、故郷を失ない不安と悲しみばかりが心を占めている多くの被災された人たち、その悲痛を思うと胸がつまって言葉もありませんが、何よりも今日ある命を喜び合いたい。苦しい時はその苦しみに耐え、悲しい時は泣き、嬉しい時には笑い、朝洗顔する時は、新しい日を迎えられたことに感謝し、夜洗顔するときは、今日一日精いっぱい生きてこられたことを噛み締めて味わうことが、今を生きることだと自分自身に強く言い聞かせております。

合掌

## 著者プロフィール



堀井妙泉（本名 / 美鶴）

昭和3年、函館市生まれ。歌人。新墾賞、北海道歌人会賞、北海道新聞短歌賞、日本歌人クラブ北海道ブロック賞受賞。平成2年より同人歌誌『英』編集発行人を務める。昭和44年、人間禅芳賀洞然老師に入門。現在、人間禅主幹布教師。庵号 / 蓮れんしやう昌庵。